

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320006

研究課題名（和文） ケアの現象学の基礎と展開

研究課題名（英文） Foundation and Development of the Phenomenology of Caring

研究代表者

榊原 哲也（SAKAKIBARA TETSUYA）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20205727

研究成果の概要（和文）：「ケアの現象学」の基礎となるべき現象学的哲学の研究に基づいて、従来の現象学的看護理論の特徴が明らかにされ、それを踏まえ、看護ケア、心理臨床、社会福祉、理学療法における「ケアの現象学」の展開の可能性が、一定程度、具体的に明らかにされた。また「ケアの現象学」の基礎として、方法論的考察がなされ、具体的なケアの事象に即し、「事象そのもの」の方から「方法」が形成されるべきであることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：This research project, based on a study of phenomenological philosophy, has clarified some essential characteristics of the foregoing phenomenological theories of nursing, and brought out several specific ideas of developing a “phenomenology of caring” in the fields of nursing care, clinical psychology, social work, and physiotherapy. It has also been shown that the “method” of phenomenology of caring should be formed and fixed in terms of the “matter itself.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2011年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
年度			
年度			
総計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：現象学、ケア、方法、記述、生きられた経験、看護、ソーシャルワーク、理学療法

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 欧米で1970年代後半から現象学を用いた看護研究が試みられるようになり、また我が国で1990年代に入って看護ケア研究でさまざまな現象学的アプローチが行われるようになるなど、本研究の背景として、看護ケアに関する質的研究において「現象学的アプローチ」が注目されつつあるという状況があった。ところが、当時の看護ケア理論におけ

る「現象学的アプローチ」は、20世紀初頭にフッサールによって創始された「現象学」が、ハイデガーやメルロ＝ポンティらに批判的に受け継がれて多様に展開された事情を反映して、きわめて多様であり、その方法も容易には見通し難い状況にあった。

(2) 研究代表者は、平成18(2006)年度から平成20(2008)年度まで科学研究費補助金によ

る基盤研究「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」の研究代表者として、「いのち」「からだ」「こころ」をめぐるさまざまな現代的問題への現象学的視点からの応用諸研究の試みを統括するとともに、自らは看護ケア理論における現象学的アプローチの解明とそこに見出される問題点の考察に携わり、看護ケア理論に用いられる現象学を概説した論考「現象学とは何か——看護ケア理論における現象学的アプローチの理解のために——」（『緩和ケア』第17巻第5号、青海社、2007年）などを公にした。けれども、この研究プロジェクトは、現象学を専門とする研究者のみによるものであったため、看護ケアの現象学にさらに深く取り組むためには、まさに看護学研究者や看護の現場従事者とのさらに密接な連携が欠かせないことが、次第に明らかになってきていた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、歴史的な現象学を思想運動の流れを踏まえ、まずもって看護ケア理論において従来試みられてきた種々の現象学的アプローチがいかなるものであり、いかなる系統に属するものであるのかを理解し、そのうえで、現場が抱える諸問題を考慮しつつ、「ケアの現象学」を展開することが目指された。その際、「ケア」という語の持つ広がりや考慮し、看護ケアを中心としつつも、医療、介護、福祉、心理臨床などにおける「ケア」も視野に入れながら、広い意味での「ケアの現象学」を構想することが目指された。

(2) 現象学を専門とする研究者と看護学を専門とする研究者とが共同し、社会福祉、理学療法に関わる研究者も加わって、これらの方面での現場従事者とも連携しながら、看護を中心とする広い意味での「ケア」の現象学の基礎的研究の充実とさらなる展開とを図ることが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) フッサールを創始者としてハイデガーやメルロ＝ポンティらに批判的に受け継がれていった現象学を思想的展開に関する共通の理解の地盤をまず形成し、それに基づいて、従来のさまざまな現象学的看護理論、さまざまな現象学的アプローチの特徴とそれらの間の相互関係を把握することに努めた。

(2) 上記(1)に基づき、研究代表者並びに研究分担者は、現象学の方法論、緩和ケア、精神科医療、社会福祉領域、理学療法等、各自の専門領域において、「ケアの現象学」の基礎的確立に寄与しうる個別研究に取り組んだ。

(3) 年に3～5回程度の研究会を開催し、研究代表者並びに研究分担者の個別研究を相互に検討し合うとともに、外部から看護学の専門家や緩和ケアの現場従事者を招いて、研究交流を行い、ケアの現象学の展開の可能性を探ることを試みた。

## 4. 研究成果

(1) 平成21(2009)年度は、研究遂行の具体的手順を全員で確認したあと、広い意味での「ケアの現象学」の新たな展開に向けて、各々の立場、専門領域から個別研究を開始するとともに、計4回の共同研究会を行い、まずは「ケアの現象学の基礎」を固めるべく、従来の「現象学的看護研究」の特徴を再確認すると共に、北欧で展開されている新たな現象学的アプローチを学んだり、研究協力者河正子氏を招いて緩和ケアの実情を学んだりして、共同研究の実を深めた。

平成22(2010)年度は、新たに現象学的社会学を専門とする西村高宏を研究分担者に加え、各自の個別研究をさらに進めた。また、それとともに、計5回の共同研究会を開催し、その研究成果を互いに検討し合い、広い意味での新たな「ケアの現象学」の形成に向けて、その方向性を探る作業を行った。そのうち2回の研究会では、外部から、我が国における現象学的看護研究の先駆者である池川清子氏、ならびに研究協力者で緩和ケアの専門家である田村恵子氏を招いて講演をしていただき、研究交流を行った。

平成23(2011)年度は、以上の研究活動を踏まえ、「ケアの現象学」に関する各自の個別研究を一層進めるとともに、共同の研究会において、それら個別研究を互いに検討し合い、新たな、広い意味での「ケアの現象学」の形成に向けて、共同でその方向性を探り、研究成果をまとめることを目指した。東日本大震災の影響が案じられたが、計3回の研究会を開催することができ、外部の看護学研究者を招いての研究交流も行った。

(2) 研究代表者並びに研究分担者各自の3年間にわたる個別研究の成果は以下の通りである。

代表者、榎原哲也は、まずフッサール現象学の方法に関する基礎的包括的研究を行なうことによって、現象学における認識論的アプローチと存在論的アプローチとの違いとそれらの相互関係を明確化し、それを踏まえて、従来の現象学的看護理論の基本的論点を見極める作業を行った。その結果、従来の看護研究における「現象学的アプローチ」にも、大きく分けて認識論的なものと存在論的なものがあり、最終的には両者が相補い合うことによってこそ、十全な現象学的看護研究が成立しうるということが明らかになった。また、

現象学が創始者フッサールにおいてそうであったように、現象学的看護研究も「事象そのものの方から」立ち上げられるべきものであり、その意味で、事象そのものに即した「ケアの現象学」の今後の可能性が広く開かれていることを明らかにした。さらに、自殺に傾く人や不安障害患者のケアに関する現象学的考察を行い、ベナー／ルーベルの現象学的看護論を支える現象学的人間観が、一定程度、有効であることを示した。

分担者、浜渦辰二は、現象学と精神医学の関連のなかで「ナラティブとパースペクティブ」の問題を考察しつつ、高齢者医療と終末期医療におけるケアの現状を調査するとともに、その問題点を理論的に考察した。また、その延長線上で、伝統的ケア理論と現代の臨床的場面とを繋ぎながら、「こころ」のケアへの現象学的アプローチを検討した。さらに、高齢社会における医療・看護・介護に焦点を当てながら、現代のケア学と臨床的場面とを照らし合わせつつ、ケアへの現象学的アプローチを検討した。

分担者、西村ユミは、多分野で現象学的研究に取り組んでいる者とともに、各分野における現象学的研究の特徴を議論するとともに、看護やケアの領域においてなぜ現象学的研究が求められるのかを検討した。また、「ケア」にかかわる多分野の研究者と現象学的研究の在り方を検討するとともに、病棟を異動した看護師の経験を、現象学を手がかりにして記述し、同時に方法論を考察した。さらに、現象学的研究の方法論、及び看護実践の編成の仕方について、看護師のインタビューデータをもとに検討した。

分担者、守田美奈子は、現象学的研究方法による看護研究の文献を検討し、看護ケア及び緩和ケアを現象学的に探求するうえでの方法論上の課題や分析方法について考察した。また、緩和ケア病棟でのフィールドワークに関して大学及び対象施設の倫理審査委員会の承認を経て緩和ケア病棟での予備調査（実習）を行い、現象学的視点から研究方法を探った。さらに、緩和ケア病棟でのフィールドワークと看護師9名にインタビューを行い、そのデータをもとに緩和ケアの実践知について検討した。

分担者、和田渡は、患者をケアする看護者が、自身の看護のあり方や看護の状況を踏まえて自己自身を配慮するという場面に焦点をあてて、看護者のセルフケアの問題を考察した。また、その問題を、看護者が患者の看護をよりよいものにするために心得ておくべきもののひとつとして位置づける考察を行った。さらに、看護師のセルフケアに関する諸問題について一層立ち入って検討した。

分担者、村上靖彦は、治癒と発達の形式構造について考察した。とくに身体とコミュニ

ケーションの構造に関して、心理臨床について考察すると共に、自閉症との対比を行った。また、心理臨床における治癒という現象のもつ一般構造を一層立ち入って考察するとともに、看護研究や障害学の事例研究を行った。さらに、看護師・助産師へのインタビューを行うとともに、看護研究における現象学の使用に関する方法論的な考察を行った。

分担者、福田俊子は、社会福祉領域における精神科ソーシャルワーカー17名の調査結果から「痛みを伴う臨床体験」に焦点をあて、その意味を、現象学的アプローチを用いて考察した。また、それまで行った精神科ソーシャルワーカーを対象とした調査を「専門性」をキーワードにして総括した。さらに、ソーシャルワーカーのインタビューデータをもとに、専門職業的自己の生成プロセスを「受動性」や「痛み」の観点で検討した。

分担者、前野竜太郎は、臨床理学療法場面における「ケアの現象学」的アプローチが、患者との間にどのように浸透しているかを、理学療法士との実際の対話を通じて明らかにした。また、臨床現場で行われている重症心身障害児への維持期理学療法から、どのようなケアの現象学的アプローチが垣間見られるのかについて、理学療法士へのインタビューデータから解釈を行った。さらに、重症心身障害、ALS、筋ジストロフィーなどの障がい慢性重度化した患者に対して、どのような「ケアの現象学」的アプローチが可能なのかを探究した。

平成22（2010）年度から分担者に加わった西村高宏は、「身体化（embodiment）」や「自己化（enselfment）」といったキーワードを軸に展開される、〈身体〉に関する現象学的社会学の最新の文献（障害学の文献も含む）を読み解く作業をとおして、現象学的社会的視点からケア理論構築の可能性に関する研究を行った。また、その研究成果を踏まえながら、「道徳的アイデンティティ」と「自己・形成」に関する議論を展開し、ケア理論の可能性についての考察を行った。

(3) 以上のように、本研究においては、まず「ケアの現象学」の基礎となるべき現象学的哲学の基礎研究に基づいて、従来の現象学的看護理論の特徴が明らかにされ、それを踏まえつつ、メンバー各自の専門領域において、看護ケア、心理臨床、社会福祉、理学療法などにおける「ケアの現象学」の可能性が、一定程度明らかにされた。ケアの現象学は、ケアの営みが多様であるのに応じて、多様な可能性を有し、しかも、現象学そのものが「事象そのもの」に即して「事象そのものの方から」立ち上げられてきたものである以上、「ケアの現象学」もまた、多様な事象に即して、それら事象そのものの方から立ち上げられ

るべきことが、明らかになったのである。

しかし同時に、そうした多様な「ケアの現象学」の「方法」に関する諸問題に取り組む必要性も明らかになった。「ケアの現象学」は、自然科学的、医学的な先入見をカッコに入れることで、具体的な生きられた経験に立ち返り、それを記述するところから開始する、という共通の方法的特徴を持ちはするものの、そこからさらにどのような「方法」によってその経験にアプローチするかは、事象そのものの方から定まってくる。それゆえ「ケアの現象学」の方法論は、ケアの現象学の具体的展開の中で開明されざるを得ないことも明らかになったのである。

したがって、「ケアの現象学」の今後の課題が、医療、福祉、看護、心理臨床等の各々の分野におけるケアの現象学をさらに具体的に展開し、その中で方法論を練り上げ、さらにケアの現象学を現場に生かすべく、現場との連携、組織化を図っていくことに存することも、本研究の成果から浮き彫りになった。本研究のメンバーを中核とし、さらに2名を加えて新たに採択された科学研究費補助金プロジェクト「ケアの現象学の具体的展開と組織化」(平成24年度～平成26年度)では、この課題の遂行が目指されるであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計45件)

- ① 榎原哲也、「生きる意味」を支えるもの——「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的一考察——、論集、査読無、30巻、2012、37-47
- ② Yasuhiko Murakami, La gravité et l'eau. - Dialogue avec un patient atteint de la SLA, Annales de phenomenology, 査読有, Vol. 11, 2012, pp. 169-179
- ③ 和田渡、ケアの哲学—看護者とセルフケアの問題—、阪南論集、査読無、47巻、2012、27-36
- ④ Takahiro Nishimura, The Earthquake Disaster is Trying Us : Thinking About the Disaster, Within the Disaster, World Association for Medical Law Newsletter, 査読無, Vol. 4, 2012, pp. 5-7
- ⑤ 村上靖彦、リズムの破れ・メトニミーとメタファー 心的外傷と主体形成、現代思想、査読無、Vol. 39-11, 2011、160-171
- ⑥ 西村ユミ、学問的協働をつくる現象学的研究——看護の立場から、日本看護科学学会誌、査読無、Vol. 31(2)、2011、103-105
- ⑦ 西村ユミ、身体性に生起する理解——体験過程としてのフォーカシング、人体科学、査読無、Vol. 20(1)、2011、1-8
- ⑧ 浜渦辰二、ケアの現象学への途上で—故・渡邊美千代を偲んで—、メタフィジカ、査読無、42号、2011、9-22
- ⑨ 福田俊子、村田明子、須藤八千代、吉川公章、精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル最終報—専門職としての自己生成プロセスにおける「痛み」を伴う臨床体験がもつ意味—、聖隷社会福祉研究、査読無、4号、2011、36-42
- ⑩ 榎原哲也、現象学的看護研究とその方法——新たな研究の可能性に向けて、看護研究、査読無、Vol. 44(1)、2011、5-16
- ⑪ Shinji Hamauzu, To a Phenomenological Approach of the Problem of Organ Transplant after Brain Death, 臨床哲学、査読有、12号、2011、20-30
- ⑫ 浜渦辰二、二つの「臨床哲学」、臨床精神病理、査読有、2巻、2011、18-26
- ⑬ 西村ユミ、看護実践はいかに語られるのか?—グループ・インタビューの語り注目して、質的心理学フォーラム、査読有、2巻、2011、18-26
- ⑭ 西村ユミ、看護ケアの実践知——「うまくできない」実践の語り示すもの、看護研究、査読無、Vol. 44(1)、2011、49-62
- ⑮ 西村ユミ、前田泰樹、「痛み」の理解はいかに実践されるか?—急性期看護場面の現象学的記述、看護研究、査読無、Vol. 44(1)、2011、63-75
- ⑯ Yasuhiko Murakami, Affection, Autism and Mental Disorders: Husserl's Theory of Meaning and Psychopathology, Studia Phaenomenologica, 査読有, Vol. 10, 2011, pp. 193-204
- ⑰ 村上靖彦、潜在的な視線触発と超越論的テレパシー、看護研究、Vol. 44(1)、2011、76-84
- ⑱ Yasuhiko Murakami, Affection of contact and transcendental telepathy in schizophrenia and autism, Phenomenology and the Cognitive Sciences, 査読有, Vol. 10(1), 2011, pp. 1-16
- ⑲ 村上靖彦、看護行為の時間 西村ユミとハイデガー行為論の拡張、UTCP Booklet、査読無、18巻、2011、141-158
- ⑳ Yasuhiko Murakami, Affection d'appel et prénom. Pour une phénoménologie de l'acquisition de la langue et de la communication, Annales de phenomenology, 査読有, 2011, pp.

- 163-176
- 21 福田俊子、精神保健福祉領域におけるソーシャルワーカーの技能習得に関する発達段階モデル 第4報、聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要、査読無、9巻、2011、131-144
- 22 西村高宏、介護福祉士の「職業倫理指針（行動指針）」作成に関する考察、高齢者虐待に対する共通認識の醸成および効果的な虐待防止対策検討のための調査研究（みずほ福祉財団）、査読無、巻無、2011、35-42
- 23 Тетсуя Сакакибара [Tetsuya Sakakibara], Переживание болезни и феноменология медицинского ухода за больным [The Experience of Illness and the Phenomenology of Nursing], Ежегодник по феноменологической философии 2009/2010 [Annual for phenomenological philosophy 2009/2010], 査読有、Vol. 2, 2010, pp. 87-99
- 24 和田渡、生きることと考えること、同志社哲学年報、査読無、33巻、2010、1-24
- 25 村上靖彦、潜在的視線触発—自閉症の基本構造についての現象学的仮説、精神科治療学、査読無、Vol. 25(12)、2010、1627-1632
- 26 Yasuhiko Murakami, De la telepathie transcendante - La communication et la creativite selon Winnicott, Annales de phenomenology, 査読有、Vol. 9, 2010, pp. 83-96
- 27 榎原哲也、看護ケア理論における現象学的方法—ナミン・リー「現象学と質的研究の方法」に寄せて、死生学研究、査読無、12号、2009、35-48
- 28 浜渦辰二、ビジネス・倫理・ケア、西日本哲学年報、査読有、17号、2009、93-110
- 29 Yasuhiko Murakami, Silence, style, reve : Merleau-Ponty et la metamorphose du sujet, Bulletin d'analyse phenomenologique, 査読有、Vol. 5(7), 2009, pp. 1-17
- 30 村上靖彦、超越論的テレパシーを貫く治療者の欲望 フッサールとドルト、現代思想、査読無、Vol. 37(16)、2009、224-236
- [学会発表] (計65件)
- ① 榎原哲也、不安・抑うつ臨床哲学—現象学の視点から、第4回日本不安障害学会学術大会、2012年2月5日、早稲田大学国際会議場
- ② 榎原哲也、「ケアの志向性」研究序説、第12回「ケアの現象学」研究会、2011年12月18日、東北福祉大学
- ③ Tetsuya Sakakibara, Phenomenological Research of Nursing and Its Method, Phenomenology as Bridge between Asia and the West Conference "Phenomenology and the Other Disciplines", May 24, 2011, Saint Louis University, Saint Louis, USA.
- ④ 村上靖彦、生と死の境目における対人関係=看護師へのインタビューから、河合臨床哲学シンポジウム、2011.12.11、東京大学
- ⑤ 村上靖彦、がんの緩和医療を専門とする看護師Cさんへのインタビューから、日本現象学会第33回研究大会、2011.11.5、立命館大学
- ⑥ 村上靖彦、メルロ=ポンティの制度論と看護の時間性、メルロ=ポンティ・サークル第17回大会、2011.9.17、神戸市看護大学
- ⑦ Yasuhiko Murakami, Gravity and Water ; Dialog with ALS Patient's Body, Phenomenology as Bridge between Asia and the West Conference "Phenomenology and the Other Disciplines", 2011.5.24, Saint Louis University, Saint Louis, USA.
- ⑧ 西村ユミ、「困ったけど困ってしまわない」看護実践の分析、第12回「ケアの現象学」研究会、2011.12.18、東北福祉大学
- ⑨ 西村ユミ、「音」の経験と看護実践の編成、日本現象学会 第33回研究大会、2011.11.5、立命館大学
- ⑩ 西村ユミ、看護実践とメルロ=ポンティの思想との往還、メルロ=ポンティ・サークル第17回大会、2011.9.18、神戸市看護大学
- ⑪ 守田美奈子、見取りと時間性、第12回「ケアの現象学」研究会、2011年12月18日、東北福祉大学
- ⑫ 守田美奈子、緩和ケアと間身体性、メルロ=ポンティ・サークル第17回大会、2011.9.18、神戸市看護大学
- ⑬ 浜渦辰二、ヒューマン・ケアと人間観—いのちの暮らしと人生を支える—、人間福祉学会、2011年11月19日、岐阜都ホテル
- ⑭ 前野童太郎、重症心身障害児・者に理学療法を行う意味の探求、第11回「ケアの現象学」研究会、2011.11.23、東京大学
- ⑮ 福田俊子、「素人性」から生成される学習—初年次の社会福祉実習教育から見えてくるもの—、第11回「ケアの現象学」研究会、2011.11.23、東京大学
- ⑯ 西村高宏、日本における「医師の職業倫理」徹底化のための処方箋—医療界にお

- けるピアレビューについて—、兵庫県医師会 自浄化委員会 医療倫理セミナー、2012.2.25、東京大学
- ⑰ Tetsuya Sakakibara, A Phenomenological Study on Caring for People with Suicidal Inclinations, The 4<sup>th</sup> International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), December 11, 2010, National Sun Yat-Sen University, Kaohsiung, Taiwan
- ⑱ 榊原哲也、「生きる意味」を支えるもの、第34回日本自殺予防学会総会、2010年9月11日、大妻女子大学
- ⑲ Shinji Hamauzu, To a Phenomenological Approach of the Problem of Organ Transplant after Brain Death, The 4<sup>th</sup> International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), December 11, 2010, National Sun Yat-Sen University, Kaohsiung, Taiwan
- ⑳ 西村ユミ、身体化された看護実践の記述的研究—新たな「場」の経験に教えられること、日本質的心理学会第7回大会、2010年11月27日、茨城大学
- 21 和田渡、ケアの哲学—看護者と1のセルフケアの問題—、第9回「ケアの現象学」研究会、2010年12月19日、東北福祉大学
- 22 Yasuhiko Murakami, Potential Affection of Contact - Autism and Otherness, The 4<sup>th</sup> International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), December 11, 2010, National Sun Yat-Sen University, Kaohsiung, Taiwan
- 23 前野竜太郎、静岡県中部在住外国人における腰痛教室の指導効果と腰痛の現状、第45回日本理学療法学会大会、2010年5月29日、メモリアルセンターで愛ドーム(岐阜市)
- 24 西村高宏、障害を負った身体と社会 — 「ポスト構造主義と現象学の結合」の先に、第9回「ケアの現象学」研究会、2010年12月19日、東北福祉大学
- 25 Tetsuya Sakakibara, Phenomenology in the Theories of Nursing, The 3<sup>rd</sup> PEACE International Conference (Phenomenology for East-Asian Circle): “The Applied Phenomenology”, September 21, 2009, Seoul National University, Seoul, Korea.
- 26 西村ユミ、身体化された看護実践の知について、第4回 身体知研究会、2009年11月28日、大阪大学
- 27 Yasuhiko Murakami, Transcendental Telepathy – Creativity, Development

and Cure, The 3<sup>rd</sup> PEACE International Conference (Phenomenology for East-Asian Circle): “The Applied Phenomenology”, September 21, 2009, Seoul National University, Seoul, Korea

〔図書〕(計5件)

- ① 村上靖彦、青土社、傷と再生の現象学、2011、300
- ② 村上靖彦、講談社、治癒の現象学、2011、200
- ③ 榊原哲也、東京大学出版会、フッサール現象学の生成—方法の成立と展開—、2009、584

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

榊原 哲也 (SAKAKIBARA TETSUYA)  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
 研究者番号：20205727

### (2) 研究分担者

浜渦 辰二 (HAMAUZU SHINJI)  
 大阪大学・大学院文学研究科・教授  
 研究者番号：70218527

西村 ユミ (NISHIMURA YUMI)  
 大阪大学・コミュニケーション・デザインセンター・准教授  
 研究者番号：00257271

守田 美奈子 (MORITA MINAKO)  
 日本赤十字看護大学・看護学部・教授  
 研究者番号：50288065

和田 渡 (WADA WATARU)  
 阪南大学・経済学部・教授  
 研究者番号：80210988

村上 靖彦 (MURAKAMI YASUHIKO)  
 大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授  
 研究者番号：30328679

福田 俊子 (FUKUDA TOSHIKO)  
 聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・准教授  
 研究者番号：20257059

前野 竜太郎 (MAENO RYUTARO)  
 聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・准教授  
 研究者番号：50347184

西村 高宏 (NISHIMURA TAKAHIRO)  
 東北文化学園大学・医療福祉学部・准教授  
 研究者番号：00423161  
 (H22～23)